

聖ルカによる福音書第10章25節～37節

於：聖パウロ教会

司祭 山口千寿

もう25年も前のことになりますが、聖地イスラエルを訪ね、エルサレムにある聖ジョージ神学校で4週間の夏のコースに参加しました。「聖書とその背景」というテーマだったので、特に旧約聖書の舞台となった各地の遺跡を見学に行きました。そのコースが始まって間もない頃でしたが、ある日、エルサレムからエリコの町に朝早くから出かけました。モーセの後継者のヨシュアが、イスラエルの民を率いてこの町に侵入したと推定される時代の遺跡や、その後、時代によって町が何回か場所を変えて造成された、その跡を見て回りました。その帰り道で、善きサマリア人が、傷ついた旅人を手当てして運んで行った宿屋がここだ、という場所を見ました。古い深井戸があり、建物の一部が家畜のための部屋、他の場所が人が生活する部屋であるということでした。

しかし、良く考えてみると、そんな宿屋の跡があるわけではないのです。というのは、このたとえ話は、イエスさまが語られた物語、譬えであって、史実に基づいた出来事ではないからです。それを現代人が、いかにもそれらしき場所を利用して、巧みに観光の場所として、言葉は悪いですが、でっち上げた、というわけです。うっかりすると、そこで沢山お金を払って、善きサマリア人を偲ぶという、逞しい商魂にしてやられることになってしまいます。それでも折角の聖地旅行ですから、もし皆さんがいらっしゃる機会がありましたら、エリコ街道を通るときには、是非、この物語を思い出して、「主を愛すること、隣人を愛すること」を黙想できれば、素晴らしいことだと思います。

善きサマリア人の物語は、イエスさまのたとえ話であると言いましたが、しかし、単なるフィクションではないと思います。エルサレムからエリコに向かって下っていく道は、およそ30キロ弱の道程（みちのり）ですが、沙漠の中の荒れ地に行く道です。実際にこの寂しい道を通る人が、強盗に襲われることは珍しいことではなかったでしょうし、そのために半殺しどころか、命を失う人もあったことでしょう。

そして、何よりも、人生の旅路で傷ついて、うずくまっている人々の側に近寄って、隣人になられたイエスさまが語られた物語です。悩みや苦しみの中にある人々の中に来て、痛みを共にされて愛を示されたイエスさまの、毎日のみ業に裏打ちされた物語です。譬えではあるけれども、そこに神さまの愛が語られ、神さまの愛を行ったイエスさまが語られているのです。

このたとえ話をイエスさまが語られることになったきっかけは、律法学者、律法の専門家の質問でした。「永遠の命を継ぐためにはどうしたらよいのでしょうか」と尋ねます。この問いは、最も宗教的な問いであると言えるでしょ

う。過ぎ去っていくもの、空しく消え去るものに、目の色を変えながら毎日の生活を送るのではなくて、永遠なるもの、変わることはないものにしっかりと立って、確信をもって人生を生きていくためには、何をしたら良いでしょうかという問いは、わたしたちもまた、その答を探し求めている問いでもあると思います。

信仰生活というのは、自分が神さまの真理を何もかも分かってしまったから、それで信仰に入ったということではありません。神さまの愛の教えを実行できるようになったから、それでは洗礼を受けましょうということでもありません。いつも追いかけていくのです。イエスさまに肩を並べて歩くのではなくて、イエスさまの後から従っていくことが、信仰生活です。パウロは次のように言っています。「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。」(フィリピ3:12)

理想に到達したから信仰するというのではなくて、永遠の命を把握し自分のものとするために追いつけるプロセスが、わたしたちの信仰生活です。なぜならば、そのためにイエスさまがわたしたちを捕らえ、ご自分のものとして下さっているからです。イエスさまが捕らえていて下さる、わたしたちを「友」と呼んでいて下さり、更には「兄弟」とまで(ヨハネ15:15、20:17)言っただ下さっている、そこに気付くことが信仰です。

さて、律法学者の質問に対して、イエスさまは直接答えることをなさらずに、逆に問い返されます。律法には何と書いてあるか、どのように理解しているかとお尋ねになりました。イエスさまを試そうとした律法学者が、自分でその答を出すことになりましたが、専門家ですから直ぐに正しい答を述べることができました。その答えは、ユダヤ人が朝夕に唱えていた「シェマー」と呼ばれる信仰告白の一節(申命記6:5)とレビ記のみ言葉(19:18)を結びつけて、「神である主を愛すること、そして隣人を自分のように愛すること」というものでした。

神さまを愛することと隣人を愛することは、1枚のコインの表と裏の関係です。切り離すことができません。

神さまは愛するけれども、隣人は愛することができない。隣人は愛するけれども、神さまは愛することができない。これはわたしたちの愛の悩みです。ヨハネの第1の手紙には、「『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません」(4:20)と大変厳しく指摘されています。わたしたちはこのようなみ言葉を前にしたとき、ただただ頭(こうべ)を垂れる他ありません。頭を垂れて、自分の愛の貧しさを赦していただくことを祈る以外にありません。

律法学者は、自分が答えたその答を実行しなさいとイエスさまに言われて、愛の乏しさを正当化しようとしたのです。自己弁護しようとしたのです。知っていることと、それを実行することとの間には、しばしば不一致が生じます。

わたしたちもそのような不一致が起きてくると、慌てて弁明したり、建て前と本音の相違を言い繕おうとします。

そこで律法学者が持ち出したのは、隣人とは誰かという問題です。人を愛することができないのではありません。愛する人もあるのです。だけれども愛の器が大きくないのです。ごくごく小さなものでしかないのです。同胞を愛するだけで、精一杯なのです。そこで、愛の対象を限定することによって、律法を守っている、ひいては永遠の命を継ぐものと認められることを求めたのです。

イエスさまは、善きサマリア人の譬えを語られました。そして、祭司、レビ人、サマリア人の3人のうち、誰が強盗にあった人の隣人になったかと尋ねます。「その人の痛みを分かって、行いにおよんだ人」（本田哲郎訳）と律法学者は答えます。イエスさまの結論は、「行って、あなたも同じようにしなさい」ということでした。

このイエスさまの結論は、律法学者に対して、そしてわたしたちに対して、善いサマリア人になりなさい、と命じておられるのでしょうか。隣人が誰であるかなどというような議論をするのではなくて、困っている人、傷ついて倒れている人がいることに気がついたら、その人が誰であっても、仲の悪い人であっても、親切にして助けて上げなさい、と求めておられるのでしょうか。

律法学者は、わたしの隣人とは誰ですかと尋ねました。わたしが愛を施す相手は誰でしょうかという質問です。それに対してイエスさまは、誰が隣人となったかと問い返しています。誰が隣人となって、傷ついた旅人に愛を施してくれたかと尋ねているのです。イエスさまの言う隣人とは、わたしの愛の対象ではなくて、わたしに愛をくれる人のことです。

律法学者は、完全に律法を守ることを心がけて実行する人です。隣人を愛することに於いても、いつも自分がその主体です。愛を行う人です。その律法学者に、イエスさまは、あなたは愛をもらう人になりなさいと仰ったのです。

完全無欠に振る舞おうとする人は強い人です。人生の勝利者です。そういう人は、実行しようとしても、できない人の悩みや苦しみを理解できません。できない人をバカにするか、憐れんで高い立場に立って、そこから施しを与えることしか知りません。そのような人に、イエスさまは、苦しむ人の中に立つことを求められます。痛みを知る人になることを、弱い立場の側に身を置くことを求められました。神さまに愛されること、愛されていることを知りなさい、と仰ったのです。自分の愛の破れを知って、神さまの前に素直に謙虚になって額づき、赦しを乞う人になることが、イエスさまのお求めになっていることです。自分の全力を尽くして、愛の人になるべく努力するのではありません。神さまの愛を知ることによって、そこから隣人への愛が生まれてくるのです。

「行って、あなたも同じようにしなさい」というみ言葉は、まず、わたしたちが一心に神さまの愛をいただく者になりなさいという勧めです。愛され

ることがなければ、愛することはできません。「神がまずわたしたちを愛してくださった」(Iヨハネ4:19)のです。その神さまの愛に、わたしたちも生きるものとされるよう、へりくだりの心が与えられることを祈り求めたいと思います。